◆子どもの興味と視点を広げる地理ネタ＋授業化ヒント

南アジア

耐え難い暑さと驚くべき多様性

中溝 和弥

南アジア、なかでも域内で最大の人口と領土を抱えるインドの特徴は、耐え難い暑さと驚くべき多様性である。

1　耐え難い暑さ

インド政治の研究者としてほぼ6年間を北インドで過ごした。快適な日本と異なり苦労が多かったが、暑さは格別であった。日本も近年随分暑くなったと言われるが、インドに比べるとまだ涼しい。

北インドの夏は、大体3月半ばから始まり、4月に入ると40度を超える日が多くなる。5月に入ると気温は更に上がり、私の経験では47度が最高だった。この時期、デリーでは、西のラージャスターンの砂漠地帯から、ルーと呼ばれる熱風が吹く。これはドライヤーを全身に当てているようなもので、ルーに当たると体が干からびていくのがわかる。すぐに水を飲むが、1リットルでもまだ飲み足りない。洗濯物を干せば太陽の熱はいつまでも残り、お風呂上がりに身につける下着が熱い。日本ではあり得ない経験に、本当に驚いた。

冷房があるではないか、と思われるだろう。しかし、インドでは冷房はお金持ちのものである。私が住んでいた大学の寮には、天井につり下げられた巨大な扇風機があるのみだった。この扇風機のありがたさを実感するのは、停電の時である。一晩中停電したときなどは、眠れずに拷問のようであった。まだ書き足りないが、ここでやめておく。

2　驚くべき多様性

最新の２０１１年国勢調査によれば、インドの人口は12億１０５６万９５７３名である。中国に次ぐ世界第二位の人口を誇るが、２０３０年には中国を抜いて世界一位になると予測されている。昨年行われた総選挙では、有権者は8億３４１０万１４７９名であった。この規模で選挙を懸命に準備して、有

権者も日本より積極的に選挙に参加し（２０１４年総選挙の投票率は66・４％）、政権交代もきちんと行われるので、いつも感嘆する。

人口は日本の10倍であるが、国土も約９倍なので、人口密度は日本とさほど変わらない。しかし、多様性には驚くべきものがある。私はインドの東西南北の端を訪れた経験があるが、言語、民族、文化、気候など全く異なっていた。日本も北海道と沖縄では随分違うが、少なくとも日本語は通じる。しかし、インド北端のヒマラヤ山脈ラダック地方と南端のカニヤークマリで共に通じる言語はヒンディー語ではなく、英語であった。現在インドには、英語を入れて23の公用語が存在する。

宗教も多様である。２００１年国勢調査でヒンドゥー教徒は全人口の８割を占め、第二位のイスラーム教徒は13・４％であった。これは総数では１億３千万人を超え、イスラーム教徒国別人口としては、インドネシア、パキスタンに次いで世界第３位となる。他に、キリスト教徒、スィク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒、ユダヤ教徒、ゾロアスター教徒などが存在する。ちなみにインド最大のタタ財閥の創業一族は、ゾロアスター教徒である。

カーストも日本で教わるバラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラ、不可触民という区別だけではない。これらはヴァルナ制といういわば理念的なカテゴリーであり、これとは別に職業と密接に結びついたジャーティーというカテゴリーが存在する。全インドでは約三千のジャーティーが存在するとされ、桁違いの複雑さである。

このような多様性を誇るインドは、経済成長で注目を集めている。ＩＴ産業が有名であるが、実際にインドで近年成長著しいのはサービス部門であり、２００８年でＧＤＰに占める割合は約54％となっている。工業部門は１９８０年の25％から２００８年の28％とあまり変わらない一方で、農業部門は、１９８０年の36％から２００８年の17％にまで低下した[1]。ただし、農村人口は２０１１年国勢調査で依然として68・８％を占めており、多くの人が農業に従事していることがわかる。

このように過酷な自然環境のなかで、驚くほど多様な人びとが懸命に生活し、共存しているのがインド・南アジアである。日本にとってまだ身近な存在とは言えないが、異文化を学び、そして日本を学ぶために、南アジアほど適した地域は他にないだろう。

(1)石上悦郎／佐藤隆広編著『現代インド・南アジア経済論』ミネルヴァ書房、２０１１年、１―15頁

＜京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科准教授＞